

風土—自然資本

薄井 充裕

志賀重昂『日本風景論』が出版されたのは1894（明治27）年であった。本書は、豊かな自然のなかから生み出された日本の風景のもつ独自の素晴らしさを、はじめて、瀟洒、美、跌宕（てつとう：起伏に富む、伸び伸びとしている、の意味）という言葉であらわし多くの読者の共感を生んだ。

1935（昭和10）年には和辻哲郎『風土—人間学的考察』が上梓された。ここでは、志賀が着眼した日本の自然の特質が、「モンスーンの風土」という概念で再整理され、永きにわたって形成された日本人の精神的な気質や人心の機微が風土との関係において論じられた。和辻の問題意識は、急速にすすむ近代化の過程で日本の都市や地域が改変され、いわば無節操に西欧化されることについての危惧の念が根底にあった。

四季の移ろいに心映えし、花鳥風月を愛でる気質。その一方でいつ来るかどうか予測しえない地震、津波、台風、洪水、落雷、大雨、豪雪といった自然の猛威に常に直面し、ひとときたりとも気のぬけない緊張感。この相反する二つの「感性」をわれわれ日本人はあわせもっている。

今日、改めて自然（風土）と人（ヒト）との関わりが鋭く問われている。人は自然にくるまれ動植物とともに生態系上の依存関係のもと存在する。日々の「自然の恵み」に与るばかりでなく、「自然の改変」なくして人は生存できない。しかし、過度に自然に負荷をかけて、自然の再生産過程を大きく狂わせれば、それは、自然の破壊であり、失われた自然環境のなかでは、逆に人は生存できなくなる。そこに一定のルールが必要になる。これこそが公共性（Common）の淵源であり、自然資本をどう維持し管理するかの要諦だろう。

和辻から半世紀をへて、オギュスタン・ベルクは『風土の日本 自然と文化の通態』（篠田勝英訳 筑摩書房 1988年）のなかで、日本人の風土についての考え方は「理性の働きよりも感受性を高く位置づけ」、それゆえ「空間構成的な秩序に属する理論や体系」についての弱さを指摘する（334—336頁）。それが、自然への畏敬の念の表れであるとすれば、保持すべき特質かも知れない。しかし一方、東日本大震災から3年。自然災害や自然環境の保全と「理論や体系」でどう向き合い、その成果は何かと問われればはなはだ心許ない。われわれは、この課題をけっして「風化」させてはならず長期に粘り強く考えていかなばならないだろう。

2014年6月2日